動物園だより

No. 9
昭和49年8月1日発行

ペットブームと市民のみなさん

一昔前まではペットといえば、イヌ、ネコ、小鳥、金魚ぐらいをさしていましたが、戦後やや世の中が落ちつくにしたがい、一般家庭でもペットがさかんに飼育されるようになりました。昭和40年頃をピークとしたペットブームも、最近ではやや安定してきましたが、現在でもまだまださかんなものです。

ペットといえば愛玩動物のことですが、ペットブームはその範囲を大いにひろげ、大はゾウ、ライオンのたぐいから、小は爬虫類や昆虫の仲間まで種々雑多です。以前にはほとんど家庭では飼わなかったヘビ、トカゲ、カエルまでがその仲間入りをしています。

機械文明の発達や、数多くの公害などで人間生活が次第に破壊されつつあるなかで、人と動物（広くいえば自然）とのふれあいは大切なことだとおもいます。人の心にうるおいを与え、子供が家庭で動物たちに接することによって、生物を愛し、情操を高めるのに大いに役立つものと思います。

すこしかたい話になりますが、家庭で動物を飼う場合には、野生鳥獣保護の目的でつくられた鳥獣保護に関する法律や、文化財保護法、動物の保護及び管理に関する法律（昭和48年公布）、また京都府が昭和46年、全国にさきがけて制定した動物の飼養管理に関する条例（ペット条例）などがあり、いろいろと法律や条例の規制や制約をうけることになります。したがって、なんのきなしに野山で鳥や獣をつかまえてきて、家で飼うことはできません。このためには法に定められた捕獲の許可や飼養許可が必要です。また府条例によってライオン、トラ、ヒョウ、ゾウなど危険を伴う大型動物の飼育は規制されています。

先頃新聞などで報道され、世間をさわがせた輸入ザルの赤痢、オーム病など人畜共通伝染病なども、公衆衛生上見逃すことができない大きな問題です。

最近は市内にもたくさんのペットショップが生まれました。デパート屋上の小鳥売店や、古くからの小鳥屋さんは勿論のこと、金魚店、熱帯魚店までがブームにのって、いろいろのペット類を販売しています。ペットを入手する場合は、信用のおける店で買うことは勿論のことですが、業者の方も営利のみに走らず、責任のもてる販売をしていただきたいものだと思います。売手も買手も充分にこのことを考えていただかないと可愛そうにペットたちはその犠牲となり、時にはその終末処理を当園がやらなければならない結果となります。

一例をあげると「このサルは南方産のポケットモンキーで、これ以上大きくならない可愛らしいサル」（実は適切な飼育をすればどんどん成長し、飼主を手こずらせる結果となり、その多くは当園へ持込まれる）。

また最近では「外国産のテーブルウサギ」と称して、これも前記のサル同様上手に飼育すれば数ヶ月で一人前のウサギに成長してしまいます。これは普通のカイウサギの哺乳中のものを一ヶ月たらずで親からはなされた可愛そうな子ウサギたちです。

売る側だけでなく、買う側も充分な予備知識をもって、売手の言葉をうのみにしてはいけません。

毎日のように当園に持込まれるペット類や、電話での問合せなどを考えると、市民のみなさんの中にはペットの飼育をあまりにも安易に考えすぎているようにおもいます。子供たちのために街角でペットを買い与えることは結構なことですが、責任をもって最後まで飼育してやってほしいものだと痛感いたします。可愛らしい間だけ手なぐさみにして、大きくなればもうあきてしまって動物園へ、これではペットたちはあまりにも可愛そうです。動物を飼うことはなかなか大へんなことです。充分な知識と愛情ある飼育で一生を全うさせてやりたいものです。最近はペットに関する書物も本屋さんの店頭にならんでいます。本をよく読んで知識をうるなり、動物園に問合せれば適切な飼育指導をうけることができます。

動物に心からの愛情と責任をもって接すること、また他人に迷惑をかけないことの二点がペット飼育上での最も大切なことです。簡単なことのようですがこれがなかなかできないことなのです。適切な管理をおこたると逃げだして人に危害を加えるなど大へんなことになります。動物たちの習性をよく理解して、日常の飼育をやってくださるようお願いします。

動物園としては、市民のみなさんが正しいペットの飼育をされることは双手をあげて賛成いたします。このことにかけては動物園はプロですから、どんどん利用していただければ結構です。

この一文がペット飼育のためのなにほどかの参考となれば幸いです。

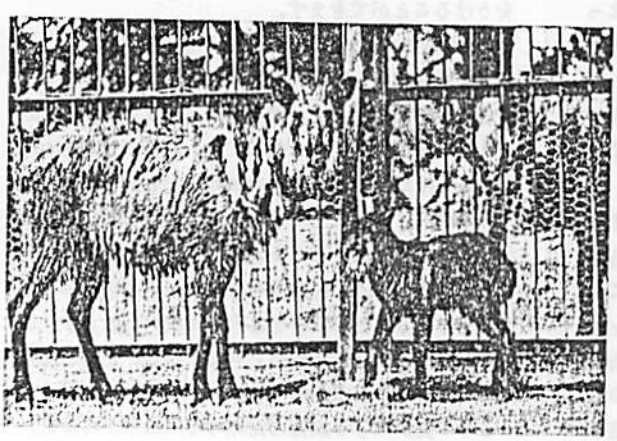
（M. N.）

〃〃〃〃〃さっちゃんのこと、など……

ある日のこと

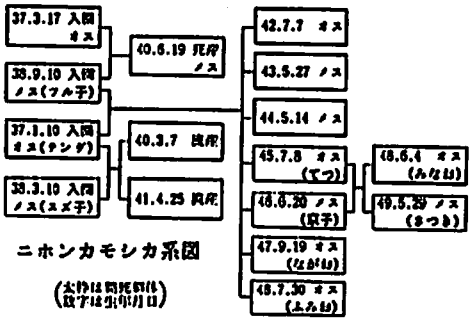
いま、この原稿を書いている段階（7月の初め）で、飼育係のおじさん達や獣医さん達は、大さわぎをしています。京子さんのこどもが病気になってしまったからなのです。京子さんというのは、私たちの動物園で飼っている、ニホンカモシカの名前です。家系図をみていただければわかるように、京子さんは、昭和46年6月20日に生まれました。そして昨年にはじめて母親となったのですが、その子どもは残念ながら、生まれて70日目に死んでしまいました。私たちは、今年こそ、京子さんの子どもがうまく育ってくれるように、願っていました。5月29日の昼すぎ、京子さんは元気な赤ちゃんをうみました。赤ん坊は、生まれて30分もすれば、足を地面にふんばって立ち上り、よろけながらも歩きだしました。シカやキリン・シマウマなど、草を食べる動物の子ども達は、生まれおちてから立ち上るまでの時間がものすごく早いものですが、カモシカの子どもも同じです。敵にねらわれると、逃げるよりほかに武器をもたない動物たちは、生まれた瞬間から自分たちの宿命をすでに自覚しているようで、なんともあわれです。飼育係のおじさん達は、歩きだした京子さんの子どもをみて、ほっとため息をつきました。このぶんだと、きっと丈夫に育ってくれるだろうと話し合っていました。そして、5月生まれにちなんで、「さつき」という名前がつけられました。さつきのさっちゃんは、母カモシカのおっぱいをいっぱいのんで、動物舎の中を走りまわり、疲れると、すみっこにうずくまるようにしてねていました。さっちゃんは、日ましに大きくなっていきました。

ところがです。ある日の午後、担当のUさんがカモシカ舎の中に入っていくと、さっちゃんの姿がみえません。Uさんは青くなって探しまわりました。いつもだと母親の横に立って、Uさんの方をみているのですが、今日は、母親の近くにもいないのです。そして、Uさんは、とんでもない所で、さっちゃんのあわれな姿をみつけました。カモシカ舎の中には小さな滝がつくってありますが、その滝の上に、ちよっとした水たまりがあります。さっちゃんは、この水たまりの中に体を横たえて、苦しんでいました。Uさんはさっちゃんを抱きかかえると、獣医室へと走りました。体温は41度にも上り、ぐったりとしています。心臓も弱っています。このままでは、すぐに死んでしまうにちがいありません。酸素吸入、体のマッサージ、注射、注射……とたて続けに手当が行なわれた結果、3時間ほどたって、いくらか元気をとりもどしてきました。しかし、このまますぐに母親の京子さんのところにかえす訳にはいきません。可愛そうですが一晩だけ、入院することになりました。あくる朝、熱は下っていました。元気さもかなり回復しています。本当はもう数日入院している方がよいのですが、この辺が私たち人間とのちがいです。さっちゃんはまだ母親のおっぱいをのんでいるので、おなかがすくと、また弱ってしまいます。哺乳びんにミルクを入れて与えても、うまくのみはじめるまでには数日必要です。それに、あまり長く離していると、こんどは母親の京子さんの方が、自分の子どもであることを忘れてしまう可能性もあるので、やむなく、一晩だけで、カモシカ舎の方へ帰しました。いま、この原稿は、さっちゃんを京子さんのところへもどして、ほっとしたところで書いています。



カモシカを飼う

ニホンカモシカ、それはこの名前が示している通り、日本だけにすんでいます。本州・四国・九州の高い山に、群れはつくらずに、ひっそりとくらしているのです。北海道にはいません。昔はあちこちにたくさんいたようですが、上等の毛皮がとれることや、肉がおいしいこと、それに、人をあまり恐れないことなどの理由により、かんたんに鉄砲などでうたれてしまうため、生息数が急激に減ってし



ニホンカモシカ系図

（太枠は開死個体 数字は生年月日）

まい、このままほうっておけば、絶滅してしまいかねないまでになってしまいました。そこで昭和30年、特別天然記念物に指定されて、厳重に保護がされました。特別天然記念物といえば、建物でいえば国宝級です。しかし、つかまえないようにしてじっとみているだけでは、絶滅からまぬがれるかどうか疑問です。カモシカの食べものや生活のしかた、妊娠期間はどの位で、子どもはどういうふうに成長していくのか、また何年たてば一人前になるのか、といったようなことも調べなければ、ほんとうにカモシカを守ることはできません。これを調べようと思えば、ごく少数をつかまえて、飼ってみるのが早道です。私たちの動物園では、この仕事にとりくんでみようと決意をしました。特別天然記念物に指定されたのと同じ年の昭和30年、国の許可をもらい、猟師の協力を得て、鈴鹿山系の滋賀県側で、おす・めす1頭ずつをつかまえて、京都につれて帰ってきました。しかし、残念ながらこの2頭は、1年半と90日というそれぞれ短い飼育期間で死んでしまい、試みは見事に失敗に終りました。

カモシカをまもるために

今年生まれたさつきのさっちゃんを加えると、いま私たちの動物園では合計7頭のカモシカを飼っています。このうちの5頭は、動物園で生まれたものです（家系図をみてください）。はじめの頃の失敗も、どうにかとりもどせたと思っています。カモシカを飼うためには、どんなえさをどれ位与えたらよいか、どんな環境で飼えばよいか、1日にどれ位の距離を歩くのか、糞の量はどれ位か、一人前になるまでには何年ぐらいかかるのか、妊娠期間は何日位か、どれぐらい生きるのか……私たちは多くのことを知ることができました。こうして得られた記録は、ただ単に記録として終ってしまうのではなくて、野生のカモシカを保護するための基礎資料として使われています。たとえば、1つの山にカモシカが何頭すんでいるかを調べようとする場合、1頭ずつ数えていくことは不可能です。そこで、1日の排糞量や歩く距離の数字をもとにして、生息数を推定するのです。その山にすんでいる数が少なすぎるときには、少なくなった原因を調べ、もう一度数がふえるような環境にしてやる必要があります。また、春から夏にかけて、その年に生まれた子どもが親にはぐれてヒヨコヒヨコと人家のあるあたりにまででてくることがあります。ほうっておけば野犬にかみ殺されたり、うえ死にしたりすることでしょう。こんなとき、動物園で一人前に育てた経験をもっていると、その技術を生かして、立派に育ててやることもできます。いまカモシカのために、こういう仕事をしている施設が10カ所ほどあります。

静かな環境で

ニホンカモシカは、動物園のいちばん奥まったところに、ひっそりとくらしています。わかりにくい場所なので、みずに帰ってしまうお客さんも少なくありません。カモシカのためには、この方が静かでよいのかもしれません。しかし、まだ一度もニホンカモシカをみたことがないのなら、いちどみてください。派手なところが全くないニホンカモシカ。それだけに、いつまでみていてもみあきないニホンカモシカ。　（Y）

作品募集

動物園ではいま小学校による児童動物画を次の要領によって募集しています。優秀な作品は園内に展示し、表彰式も行ないます。たくさん応募してください。

画題	園内の動物または風景
参加資格	市内の小学校児童
応募期間	9月10日まで
提出場所	動物園総務課（事務所内）
用紙	四つ切り
画具	クレヨン、水彩、パス類
作品展示	市長賞その他の作品を9月15日～18日動物園内に展示し、16日に表彰式を行ないます。

❀動物豆知識❀

『早成性と晩成性』

自然が急激に狭められていく今日ですが、だれでも一度は生まれたばかりの赤裸のひなや生まれ落ちてすぐ立上がろうと懸命に努力している子鹿などを実際に又はテレビなどを通して見られたことがあると思います。野性の生物が生きると云うことは、その子は勿論、親にとっても大変な事なのです。

動物の生まれた時の状態は、種によって異なり、種々の型があります。哺乳類のシカ、カモシカなどの子は、目はすでに開いており、間もなく自力で立上がりおぼつかない足取で親の跡を懸命について行きます。しかし、ライオン、キツネなどの子は、目が見えず自由に歩ける様になるまでには多くの日数がかかります。前者の様な状態で生まれるのを早成性といい、後者を晩成性といいます。

鳥類でも同様で、スズメやツバメのひなが生まれたときは、綿羽もなく赤裸で目は見えず耳も聞えず、足も弱く体をささえる事ができなくて、巣の底に転がっています。そして親鳥の大変な努力で餌をもらい育ちます。このようなひなを晩成性と云います。これに対して、キジやカモのひなは、生まれた時すでに綿羽に包まれ、目も耳も開いていておそくとも1日足らずで巣を離れ、親から餌の在所（ありか）を教えてもらうだけ、このようなひなを早成性といいます。

ひなが早成性か晩成性かは、次の4項がいずれであるかで決まり、早成性と晩成性の間には種々な段階があり複雑です。

1…綿毛に包まれている	1′…赤裸である
2…移動能力がある	2′…ない
3…目や耳が開いている	3′…開いていない
4…食物を自分でとる	4′…親からもらう

早成性—1 2 3 4—キジ、カモ、チドリ
〃　—1 2 3 4′—カイツブリ、ツルクイナ
半早成性—1 2 3 4′—カモメ、ヨタカ
半晩成性—1 2′ 3 4′—ワシ、タカ、サギ
〃　—1 2′ 3′ 4′—フクロウ、ペンギン
晩成性—1′ 2′ 3′ 4′—スズメ、キツツキ、オオム

その動物が生物界でどのような位置にあるか？どのような所で生まれるかで異なり、常に肉食動物からの危険にさらされている草食動物や地上営巣の鳥は、早く自立しなければならず早成性なのです。

（K.M）

できごと

☆4月3日
治療を続けていたホッキョクグマのおすが、とうとう死にました。この個体は昨年の7月24日、めすと一緒にきましたが、昨年の冬頃から吐吐をくり返し、弱ってきました。死因は胆石症でした。

☆4月19日
待望の爬虫類館が開館されました。この日、午前10時から市長をはじめ、幼稚園の子ども達、工事関係者が集まって完成を祝い、そのあと一般の方々にみていただきました。美しくて大変みやすいと、好評でした。

☆4月28日
入口近くの大水禽舎で抱卵していたシュバシコウは、この日、ひなが3羽孵化しました。その後もすくすく成長しています。

☆5月15日
傷ついたり、弱ったりして動物園へ運びこまれる野生動物がたくさんありますが、その中からタヌキ・パン・ゴイサギが元気になったので、放してやりに行きました。

☆5月28日
エボシドリのひなが2羽巣立ちました。両親は、姉妹都市であるドイツ・ケルンの動物園から贈られたもので、今までに何回かひなをかえしましたが残念ながら途中で死んでしまい、巣立ちまでこぎつけたのはこれが初めてです。そして、日本では初めての繁殖例です。

☆6月5日
アメリカのフィラデルフィア動物園へ、トモエガモ6羽とカルガモ6羽をおくりました。これらは私たちの動物園から親善のためにプレゼントしたもので、フィラデルフィア動物園からはアメリカオシ6羽とアメリカヒドリ6羽がやってくる予定です。

☆6月10日
キリンの子どもを熊本の動物園へ送りました。これは昨年の4月9日に生まれたおすで、第4番目の子どもです。

☆6月27日
ヒョウが生まれました。子どもは2頭ですが、母親がだいじに育てているので、まだ性別はわかりません。

（Y）

■ 第10号の発行は10月13日（日）の予定です。
■ 定期購読を希望される方は80円（1年分）を同封して動物園技術課までお申し込みください。

動物園だより　№9　編集・発行人　林田礼俶
発行所　京都市動物園
京都市左京区岡崎・岡崎公園内　TEL 075(771)0210・0211